

「愚か」という意味でしょうか。本来の行動から逸脱しているが、行動している本人はそれに対して知らずに行っている事が「愚か」なことです。愚かとは、自分が他人の行動を見て「馬鹿だなあ～」と中傷してしまう思いも含まれます。私たちはそれが愚かな事であると知っていれば、それを行いません。自分は正しく行動ができていて、愚かな行動をしているとは思っていません。本来の「愚か」という言葉は他人比べ、優劣を感じるためのものではなく、自分を確かめ、戒めるためにあると聖書は言っています。今日の聖書箇所によれば「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです（1：27）」と書かれています。聖書では愚かなものを用いと言われ、私たち人間は愚か者であると言っています。人間が愚かさ陥ったのはいつなのでしょう。それはアダムとエバにさかのぼります。アダムとエバは人を見るように創造されていませんでした。それでアダムとエバは裸で生活していました。しかし蛇の誘惑に負け、禁断の実を食べた後、神の前から姿を隠しました。神が「どこにいるのか」と尋ねた時、「私は裸なので、恐れて、隠れました。」と言って、いちじくの葉で覆ったと書かれています。誰かが自分を見てお互いに意識したために、服を着るようになっていきました。オシャレをするようになっていくのは、それを見て評価する人がいるからです。アダムとエバはお互いを見るようになったために、いちじくの葉で覆うようになりしました。神が天地創造した時、人に地を管理する事と自分自身を従わせる事はセットで任せました。しかし罪を犯すことによって、他人を見るようになりしました。「愚か」という言葉は自分自身を省み、判断するためではなく、他人を計る物さしになりました。罪を犯した人間は神から隠れ、責任転嫁をしました。自己義から相手が悪いと言っていました。人間は完全ではありませんので、失敗＝愚かな事をしてしまいます。本来したいと思っている事から逸脱して、できない事が失敗であり、愚かなことです。それを他人がするから愚かであると裁いているのです。裁いている私たち自身も愚かな者なのです。しかしこの「愚か」が自分を見つめるために用いばいいのです。アダムとエバが罪を犯した時、「自分は愚かでした、赦して下さい」と神に言えれば良かったかもしれません。しかし「あの女が悪い」と言い、女も「蛇が悪い」と言っていました。これによって人に原罪が生まれました。イエスキリストはそんな罪人を救うためにこの地に来られ、十字架の道を歩まれました。今日、私たちは自分の愚かさをしっかりと見つめましょう。聖書には知恵ある者はずかしめると書かれています。この知恵は人の愚かさを見て学んだことによって得たものです。他人をみて「あの人のようになりたくない」と思ったのです。これは「する賢い」だけです。私たちは「愚か」を間違っって認識して日常で使っています。他人の失敗から学んでいるだけです。これでは本当の賢さを得ることはできません。賢さとは自分の事を省みることしか、得る事ができません。自らの愚かさを見つめ、弱さを認めるからこそ、本当の強さが身につきます。自らの弱さが分かるから、他人を愛せるようになり、神を愛せるようになります。あの人のようになりたくないと思って、他人を否定している限り、愛することはできません。返って裁いた通りに自分が裁かれるようになります。私たちは愚かものにならないために①自分の行いを知りましょう。「私は自分のしていることが分かりません」と書いてあります。私たちは自分自身のしていることを「なぜしているのか、どうしてしているのか」しっかりと理解して行動しているのでしょうか。私たちが生きていく中で、しっかりとした中心を持たない生き方をしているのであれば、愚かな生き方になってしまいます。それは自らの得た知恵は他人の失敗だからです。失敗をしないように改善したからといって、完全になるわけではありません。失敗しないためには自らが経験した事に頼ってはいけません。そのためには自分自身を理解していく必要があります。「これをしてはならない、こうするべきである」という私たちの中にある良心は誰から学んだのでしょうか。両親の影響が強く現れますが、私たちの良心が人ではなく、聖書から影響を受けて判断できるようになりましょう。私たちが他人を見て学んでいる事が愚かな事と言っています。他人を見て、自分だけが良ければいいという自己中心であれば、的を外しています。これが愚かな行動です。人は原罪があり、的を外した歩みをします。そこから学んだとしてもやはり、的を外した事しか学ぶことができません。私たちは目的をしっかりと持ち、私たちを評価している方から学んでいきましょう。②愚かさとは自分を計るものです。聖書は「賢い人のように」と表現しています。「ように」とは“様”“風”“的”です。これは本物ではありません。この世でいう賢さは正しくありません。それは人の失敗の上で得てきたものだからです。しかしその中でも神の御心を求めることが賢くすると言っています。私たちは賢い人の“ように”する賢く生きていても仕方ありません。聖書が語る賢さや知恵とは人を成功させるためのものです。失敗から学ぶ知恵ではありません。人の失敗からしか学んでいないと、自らが失敗した時や想定外の事が起こると失敗してしまいます。聖書は人を生かすものであり、成功するための法則です。自らを見つめるために用いていきましょう。聖書は自分の取り扱い説明書とも言うことができます。自らを見つめ、愚かさ、弱さを理解した上で、知恵を求める事ができるからです。愚か者という他人を見たくありませんが、「愚かな自分」とまず、自らを計りましょう。そして周りの人に何か伝える事があれば、愛に基づき、自らが得た知恵によって語っていきましょう。私自身の経験から伝えるものではありません。そうすれば、私のしている事で、周りの人々は生かされていきます。神の知恵によって自らを計り、周りの人々を計っていければ、私も周りも良くなっていきます。③賢さを求める。したいことを知る。愚かものにならないためには賢い行動を聖書から学ばなければなりません。そして聖書の中から賢く歩んだ人から学んでいきましょう。聖書の中で、良いとされた人物はすべて、他人のために尽くした人です。自らが高められようとして、神の栄誉を受けた人はいません。なぜなら、聖書は偉くなりたい人は、もっとも人に仕えるものになるようにと教えられているからです。人に仕えるとは人を蹴落とすようなことではありません。人を立てあげようとする事です。聖書はこの世の変わらない法則でもあります。聖書を通して賢さを学び、実践できれば成功します。私たちは自分をしっかりと見つめましょう。私たちは何の基準に照らして判断しているのでしょうか。私たちのしていることは、失敗しないためにしているのであれば、失敗を意識しているために失敗に終わります。失敗から逃げるのではなく、失敗を通して自らの愚かさを学び、聖書の知恵に立った賢い人生を送っていきましょう。ソロモン王は神の知恵によって生きていたために、良い王として神に評価されています。私たちは自らの知恵を捨て、経験からきた知恵を捨て、人の失敗を捨て、神にあって持つべきアイデンティティーに立ち、正しい事をしていきましょう。私たちは神から学びましょう。周りの人は磨かれるために必要です。互いに高め合い、支えあっていきましょう。（要約者：平澤一浩）